

水平的多様化を目指す言語教育

— 「学士力」への批判と戦略的活用—

2021年9月3日

発題者：松本剛次・木村かおり

ファシリテーター：小畑美奈恵・古屋憲章・古賀万紀子

スケジュール

	内容	発表者	時間
1	問題提起 「学士力」への批判と戦略的活用	松本剛次 25分+QA5分	20:00 ~20:30
2	実践報告① 水平的多様化の実現に向けて —マレーシアでの実践報告	木村かおり 15分+QA5分	20:30 ~20:50
3	実践報告② 水平的多様化の実現に向けて —地方小規模私立大学での個人的試み	松本剛次 15分+QA5分	20:50 ~21:10
4	グループディスカッション	30分	21:10~21:40
5	全体ディスカッション	20分	21:40~22:00

「学士力」への批判と戦略的活用
—水平的多様化の実現のために—

松本剛次（長崎外国語大学）

今回のきっかけとなった3冊



昭和42年6月16日第四種郵便物認可 ISSN 0389-4037

日本語教育

179号

目次

〔寄稿論文〕2020年度秋季大会運動企画
健康の社会的決定要因としての「日本語」
—医療と「やさしい日本語」との出会い：研究会活動報告— 武田 裕子1

〔研究論文〕
作文におけるア系の指示詞について
—《非-共同的共有知識》という観点から— 金井 勇人 16
理系の外国人研究者が向き合う日本語に関する経験
—日本でアカデミックキャリアを履く研究者のストーリー— 近藤行人・西坂祥平 31
グループワークにおける個人的活動から共同的活動への移行
—反転授業クラスの会話分析から— 手塚まゆ子 47
年少者日本語教育における研究課題の変遷
—学校と教育の神髄案へ向けて— 南瀬涼介・本間祥子 62
動名詞の連体用法「VN / N」の使用実態と成立条件
—中国人日本語学習者の使用状況から— 石立 瑠 77

〔調査報告〕
外国語教師の継続的職能開発（CPD）の仕組み
国内の大学における「字主方」の教育としての日本語教育の現状と課題
—教学マネジメント上の位置づけと実践事例の検討から— 松本 剛次 109
日本企業での就労継続に至る中国人元留学生社員の意識と行動の変容
—TEAによるコンフリクトと解決要因の可視化を通して— 安部 陽子 124
日本語を第二言語とする学習者の縦経路同「から」の縦経形式の発達過程
—発達過程で見られる非規範的な使用の要因— 佐々木 藍子 139

〔投稿要領〕 154

2021 8
日本語教育学会

『日本語教育』179号(2021.8)
ONLINE ISSN 2424-2039
発行 公益社団法人日本語教育学会



水平的画一化・教化

国（政権）側による「思惑」

国（政権）による教育政策の立案

「評価」という名のコントロール

教育機関の「理念」

教育機関による「ポリシー」の立案

「評価」という名のコントロール

教師の「理念」

教師による授業デザイン

「教育」も変化すべき

- 21世紀型スキル
- キー・コンピテンシー

世の中の変化
(パラダイム・シフト)

水平的多様化

用語の説明：本田（2020）より

• 水平的画一化

特定のふるまい方や考え方を全体に要請する圧力。
具体的には、顕在的・潜在的な「教化」の形をとる。

• 水平的多様化

a, b, c……というかたちで示される。
多項のカテゴリー変数としての性質を持つ。

「学士力」をめぐって

- 「学士力」とは？

参考資料9 各専攻分野を通じて培う「学士力」－学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針－：文部科学省 (mext.go.jp)

「学士力」に対する批判 その1 - 1

- 「キー・コンピテンシー」や「21世紀型スキル」は旧来型の価値観、能力観を乗り越えるべく唱えられているもの。

水平的多様化

- 「学士力」はそうなってる？
- むしろ、旧来型の価値観、能力観を強化（教化）してしまっているのでは？

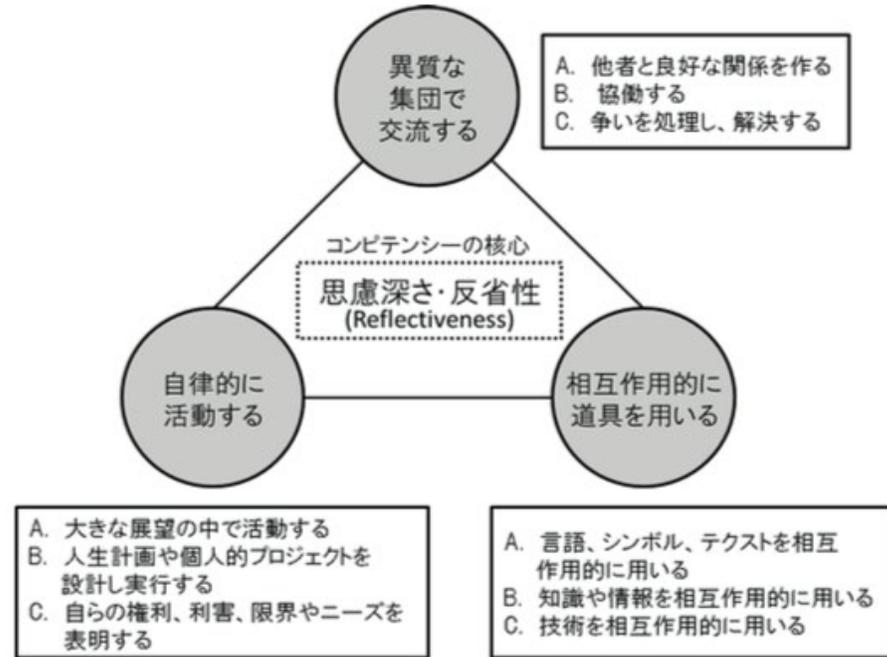
水平的画一化

「学士力」の背景

([答申本文 \(1/2\) \(mext.go.jp\)](https://mext.go.jp) より)

- 知的な構想力
 - 未来を見通し、未知の時代を切り拓く力
 - 未来を形づくり、社会をリード
 - 異なる世代や異なる文化を持った相手の考え方や視点に配慮しつつ、意思疎通ができる能力
 - 未来社会の形成に寄与する力
-
- 我が国固有のイノベーション を起こす能力
 - 我が国が生み出した固有の価値を、、、

「学士力」に対する批判 その1-2



- 「キー・コンピテンシー」での「Reflectiveness」に相当すると考えられる「批判的思考」が「学士力」では明記されていない。

- 一方で、「チームワーク、倫理観、責任」といった旧来からの日本的な価値観が前面に押し出されている。

「キー・コンピテンシーのカテゴリーと中核としての Reflectiveness」*

(*国際交流基金日本語国際センター, 2015,p.5より引用)

学士力の「見出し」

1. 知識・理解

(1) 多文化・異文化に関する知識の理解

(2) 人類の文化社会と自然に関する知識の理解

2. 汎用的技能

(1) コミュニケーション・スキル

(2) 数量的スキル

(3) 情報リテラシー

(4) 論理的思考力

(5) 問題解決力

学士力の「見出し」 (続き)

3. 態度・志向性

(1) 自己管理能力

(2) チームワーク、リーダーシップ

(3) 倫理観

(4) 市民としての社会的責任

(5) 生涯学習力

4. 総合的な学習経験と創造的思考力

「学士力」に対する批判 その1 - 3

- 「学士力」そもそもが羅列的。
- 何が中心なの？
- それぞれの項目の関係、つながりは？

「学士力」に対する批判 その2

- 「能力」というものは、要素に分解した上で習得（獲得）可能なものなのか

<大学における「学士力」の取入れの例>

- 目標としての「学士力」（と教育機関の理念）
- 「学士力」を要素に分解したうえで「カリキュラム・ポリシー（CP）」に割り振る。
- CPを具体的な授業に割り当てる。

「学士力の取入れ」の具体例

- [ディプロマポリシー（卒業認定・学位授与に関する方針） | 長崎外国語大学 \(nagasaki-gaigo.ac.jp\)](#)
- [カリキュラムポリシー（教育課程の編成方針） | 長崎外国語大学 \(nagasaki-gaigo.ac.jp\)](#)
- 「参照枠」であるべきものが「準拠枠」として捉えられてしまっている。

「学士力」に対する批判 その2

問題提起①：

あなたの現場では、学士力（あるいはそれに相当するもの）がどのように取り入れられていますか？

（舘岡，2021， p.98より）

「学士力」の戦略的活用（基本的考え方）

- 批判もあるが、「能力」の育成を重視しているという点では「学士力」は評価できる。
- 「準拠枠」的に使われてしまっているものの「学士力」自体は「参考指針」（＝参照枠）を謳っている。
- 「学士力」のこのような側面は「戦略的に」利用（活用）することができる！

「学士力」の戦略的活用（アプローチの例）

戦略的活用 = 実践研究

問題提起②：あなたの現場ではどのような実践が可能ですか？

なぜ「実践研究」なのか？（1）

- 「経験を振り返ることで、自身の経験が再構成され、自身の経験が自身の作り出す理論となり、将来の経験へとつながっていく。」
松本・津崎・小畑・木村（2021）

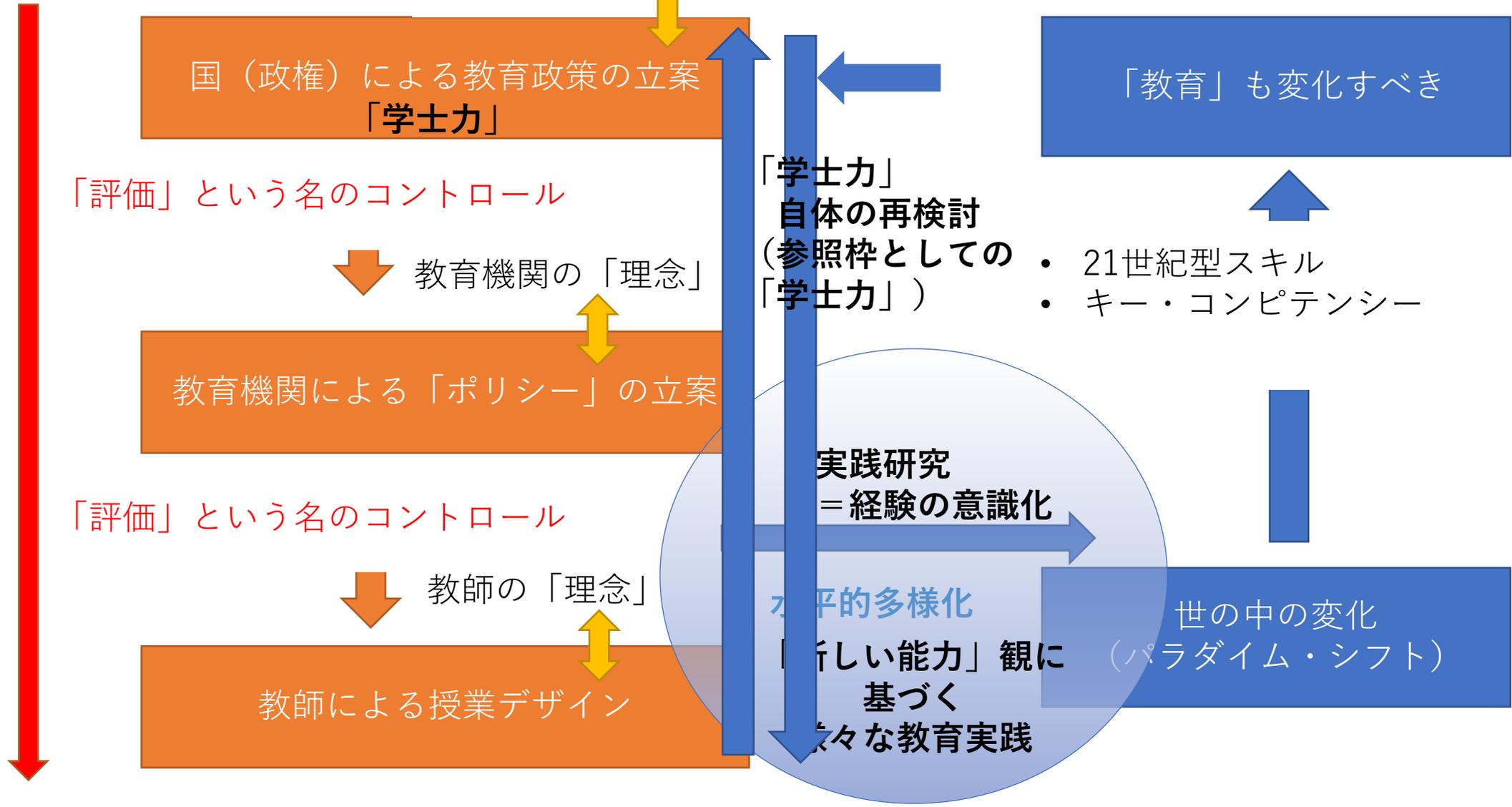
- 「個人が形成されるということは、「能力」を獲得することではなくて、さまざまな「経験」を蓄積することではないだろうか。」
- 「その経験をどうやって意識化するかということが重要だ。」
細川（2021）

なぜ「実践研究」なのか？（2）

- 教師にとっての「経験の意識化」は実践研究を行うことで得られる。
- 「経験の意識化」 = 「Reflectiveness」
- 学習者の「能力」の育成、「水平的多様化」の実現を目指すのであれば、教師こそがそのような「能力」を持った存在である必要がある。
- 「実践研究」はそのような教師に必要な「能力」の育成に役立つ。

水平的画一化・教化

国（政権）側による「思惑」



まとめと提言

- 目指すべきは「水平的画一化」ではなく「水平的多様化」。
- 現状の「学士力」は準拠枠化された上での水平的画一化。しかし、「戦略的な活用」により、参照枠化、水平的多様化の方向へと持っていくことは可能。
- そのためには実践研究が有効。実践研究は教師自身の「能力」と「水平的多様化」を高める／広める効果もある。

参考文献と資料

- Anderson, L.W et al. *A taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's*. Pearson, 2001.
- 国際交流基金日本語国際センター (2015) 『21世紀の人材育成を目指す東南アジア5カ国の中中等教育における日本語教育－各国教育文書から見える教育のパラダイムシフト－』 国際交流基金日本語国際センター
- 舘岡洋子 (2021) 「第6章 「専門性の三位一体モデル」の提案」舘岡洋子 (編) 『日本語教師の専門性を考える』ココ出版. pp.97-110.
- 古屋憲章・伊藤茉莉奈・木村かおり・小畑美奈恵・古賀万紀子 (2021) 「第1章 「日本語教師の専門性」の捉え方という問題 私たちはどのような専門性観に立脚するか」舘岡洋子 (編) 『日本語教師の専門性を考える』ココ出版. pp.3-19.
- 中央教育審議会 (2012) 『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～ (答申)』
https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf
- 細川英雄 (2021) 「「能力」育成から「経験」の意識化へ」『ルビュ言語文化教育』第790号
- 本田由紀 (2000) 『教育は何を評価してきたのか』岩波新書
- 松本剛次 (2021a) 『21世紀型能力と日本語教育 批判型日本語教師研修モデルの提案』早稲田大学出版部
- 松本剛次 (2021b) 「国内の大学における「学士力」の教育としての日本語教育の現状と課題－教学マネジメント上の位置づけと実践事例の検討から－」『日本語教育』179号 日本語教育学会. pp.109-123.
- 松本明香・津崎千尋・小畑美奈恵・木村かおり (2021) 「第7章 専門家としての日本語教師と省察」舘岡洋子 (編) 『日本語教師の専門性を考える』ココ出版. pp.111-139.
- 文部科学省「参考資料9 各専攻分野を通じて培う「学士力」－学士課程共通の「学習成果」に関する参考指針－」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu10/siryu/attach/1335215.htm
- 長崎外国語大学「デプロマポリシー (教育課程の編成方針)」http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/faculties-and-departments/philosophy_idea/diploma_policy/
- 長崎外国語大学「カリキュラムポリシー (教育課程の編成方針)」http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/faculties-and-departments/philosophy_idea/curriculum_policy/

質疑応答(5分)

- 水平的多様化とは具体的にどういうことでしょうか？
- 学生が卒業した時にさまざまな能力を身に付けて社会に出ていくと考えたときに、多様化＝「何でもあり」になってしまうのでは。多様化が「学士力」とどう結びつくのか。
- 私は日本の大学の言語教育現場が「水平的多様化ではない」と言える理由がいまいち理解できませんでした。

Q:あなたの現場では、学士力がどのように
取り入れられていますか？

水平的多様化の実践に向けて：
国家教育目標を教室実践に近づける

Kaori Kimura

3 Sep 2021



**UNIVERSITY
OF MALAYA**

日本の「学士力」を

【マレーシアの日本語教育の現場で検討する】

多言語・
多文化社会

- ・ 教育省：Malaysian Qualification Framework (MQF)を作成

これが、日本の
「学士力」に該当？

cf.日本の文科省の学士力の4つのカテゴリー

1. 知識・理解
2. 凡用的技能 例：数量的スキル・情報リテラシー
3. 態度・志向性 例：チームワーク・生涯学習力
4. 統合的な学習経験と創造的思考力

*The five clusters of **learning outcomes** are:

- i.) Knowledge and understanding (知識・理解)
- ii.) Cognitive skills (認知力 e.g. 知的スキル、分析力)
- iii.) Functional work skills with focus on: (職業基礎能力)
 - a. Practical skills (知的/職業活動における実践力)
 - b. Interpersonal skills (人間関係力)
 - c. Communication skills (コミュニケーション力)
 - d. **Digital skills** e. Numeracy skills (ICT・情報リテラシー)
 - f. Leadership, autonomy and responsibility (e.g. リーダーシップ力)
- iv.) Personal and entrepreneurial skills (キャリアデベロップスキル)
- v.) Ethics and professionalism (倫理観・社会的責任)

*注) 本Learning Outcomesの和訳は、MQF2nd versionの本文の説明内容を踏まえ、木村の文責で行った。また、紙幅の関係上割愛して訳を表示している。

日本の「学士力」を

【マレーシアの日本語教育の現場で検討する】

* 本日の事例：国立マラヤ大学（UM）

- ・ マラヤ大学では、2011年からMQFをもとに学部・学科ごとに具体的なカリキュラム（Program Learning Outcomes）を作成。さらに、科目ごとに（Course Learning Outcomes）を決める。5年おきに改訂。今学期から新しいカリキュラム。

【検討した現場のBackground】

- * UM人文社会学部東アジア研究学科日本研究コース
- * 日本語科目：3年生次・6時間/週の選択必修科目
- * 日本語レベル：初級
- * 教師：日本人、学生：マレーシア人(マレー系・中国系・インド系)
宗教は異なり、食べものに関する宗教的タブーが異なるメンバー

- ・ PLOの数は、大学が学部・学科ごとに決めている。
 - 東アジア研究学科：PLO1～PLO8の8項目
- ・ MQFに基づいて作られた学部・学科のPLOの例

PLO4： Apply **digital skills** in the production of products or works.

- * 日本語という言語科目なのにプログラムの他の科目と同じような学習成果を求められることへの違和感
- * PLOとCLOさらに、Soft skillとの整合性への違和感

HASIL PEMBELAJARAN KURSUS COURSE LEARNING OUTCOMES (CLO)	HASIL PEMBELAJARAN PROGRAMME LEARNING OUTCOMES (PLO)			STRATEGI PEMBELAJARAN LEARNING STRATEGIES	KAEDAH PENILAIAN & PEMBERATAN PENILAIAN METHOD OF ASSESSMENT & ASSESSMENT WEIGHTAGE	KRITERIA PENCAPAIAN HASIL PEMBELAJARAN KURSUS CRITERIA FOR ACHIEVEMENT OF COURSE LEARNING OUTCOME
	PLO1	PLO4	PLO5			
Menentukan kesesuaian keempat-empat kemahiran bahasa yang direka untuk tujuan komunikasi. Tahap taksonomi : C4 Taxonomy level	✓			Kuliah	Ujian (40%)	80% daripada keseluruhan pelajar mendapat sekurang-kurangnya 20 daripada 40 markah yang diperuntukkan.
Membina ayat sopan dan Tahap taksonomi : P3 Taxonomy level		✓		Kuliah Pembentangan	Pembentangan (60%)	80% daripada keseluruhan pelajar mendapat sekurang-kurangnya 30 daripada 60 markah yang diperuntukkan.
Membezakan penggunaan bahasa Jepun sopan mengikut hierarki sosial. Tahap taksonomi : A3 Taxonomy level			✓	Kuliah Pembentangan		

Construct polite & correct sentences

Digital skills



【木村の問題意識】

* PLO とCLOに整合性があるのか

* C4,P3,A3…というSoftskillの数字が示されているが、どんな学生を育成したいかを示しているわけではない。



何も
書いていない！

【2012年回想シーン】

* 当時の総合日本語 3 の

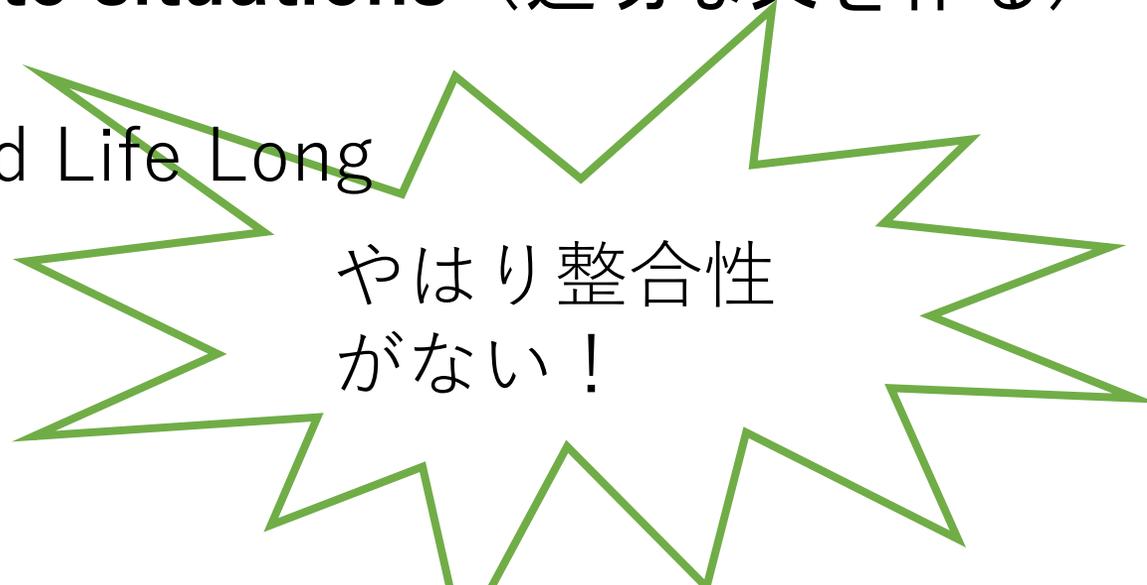
Program Learning Outcomesと **Course Learning Outcomes**の例

PL05 : Communication, Leadership and Team Skills

PL06 : Problem Solving and Scientific Skills (問題解決能力)

CLO ex) : Modify sentence structures and types of conversation according to situations (適切な文を作る)

PL07 : Information Management and Life Long Learning Skills



やはり整合性がない！

* コースカリキュラムの改善が必要では？

* いや！その前に、現場の我々が、PLOやCLOが意味することを考えず、『みんなの日本語』を使い、**文法項目習得に重点**を置いた同じ実践を毎年、繰り返しているだけなのでは？

【2012年回想シーン】



* 自分たちが選んだCLOの意味をもっと、
考える必要があるのではないか？

文法項目習得に重点を置いた授業のやり方は、
このコースの学生にそぐわないということを
考えたことはあるのだろうか。

【2012年回想シーン】



そこで

*すでに、トップから提示されている以下の**PLO**と**CLO**が意味することを

PL05 : Communication, Leadership and Team Skills

PL06 : Problem Solving and Scientific Skills(問題解決能力)

CLO ex) : Modify sentence structures and types of conversation according to situations (適切な文を作る)

PL07 : Information Management and Life Long Learning Skills

東方政策下 & 多文化社会のマレーシアにおける異文化間言語学習の観点から解釈し、自身の実践を考えることにした。

そして

…自国の他の民族との異なりを理解していると自負しているマレーシア人学生に対して、

- 1) 「異文化」とは何かを問わせる。
- 2) 宗教のタブーがある「食」をキーワードにする。

学生に対して：Critical thinkingを重視した活動型の授業を実施
教師として：授業実践をPDCAのサイクルで省察



おにぎりプロジェクト

【2012年回想シーン】

「1セメスターを通して、
おにぎりと日本人の関わりを読み取り、解釈する。
おにぎりと日本人の関わりの中に存在することばを
つかみ取り、自分たちの文脈に置き換えて文章を作る。」
→おにぎりプロジェクト（木村2013）

活動例

- ・ マレーシアで調達できる食材で、マレーシア人が食べられるおにぎりレシピの作成と調理
- ・ 『千と千尋の神隠し』で千がおにぎりを食べるシーンに注目させ視聴
- ・ 最終レポート「おにぎりと日本人」

【まとめ】

この実践から伝えたいこと

方法は、自身の**教育理念**と**フィールド**との往還で
生み出される。

Q:あなたの現場では、学士力がどのように
取り入れられていますか？

A:自身の教育理念とフィールドとの往還で。
(→実践とフィールドの往還：次のPPTで再掲)



実践とフィールドの往還例

*すでに、トップから提示されている以下の**PLO**と**CLO**が意味することを

PLO5 : Communication, Leadership and Team Skills

PLO6 : Problem Solving and Scientific Skills(問題解決能力)

CLO ex) : Modify sentence structures and types of conversation according to situations (適切な文を作る)

PLO7 : Information Management and Life Long Learning Skills

東方政策下 & 多文化社会のマレーシアにおける異文化間言語学習 (フィールド) の観点から (自分の教育理念で) 解釈し、自身の実践 (方法) を考えた。

参考文献

- 木村かおり (2013) 「多文化社会における異文化間言語学習能力を考える-おにぎりプロジェクトを通して」 『日本語プロフィシェンシー研究』 1:138-156,凡人社.
- キャシー・ジョナック・根岸ウッド日実子・松本剛次(2008)「オーストラリアの初中等教育における外国語教育の現在と国際交流基金シドニー日本文化センターの日本語支援-Intercultural Language Teaching and Learningの考え方を中心に-」 『国際交流基金 日本語教育紀要』 4:115-130,国際交流基金.
- トムソン木下千尋(2011)「Intercultural Language Learning (文化間言語学習) が目指す学習者が育成していくべき日本語能力」 『早稲田日本語教育学』 9:121-136,早稲田大学大学院日本語教育研究科.
- 松本剛次 (2021) 「国内の大学における「学士力」の教育としての日本語教育の現状と課題-教学マネジメント上の位置づけと実践事例の検討から-」 『日本語教育』 179: 109-123.

- Fakulti Bahasa dan Linguistik** (2011) Buku Panduan, Ijazah Dasar besi 2011/2012
Faculty of Arts and Social Science (2011) Undergraduate Handbook Bachelor of Arts
Session 2011/2012 University of Malaya
- Faculty of Arts and Social Science** (2020) Undergraduate Handbook Bachelor of Arts
Session 2020/2021 University of Malaya
<<https://fass.um.edu.my/undergraduate-prospectus>>
- Kimura, K.** (2012) Learning outcomes of a Japanese Language class under the
Look East Policy : from the perspective of Intercultural Language Learning.
International Seminar 30 Years Celebration of the Look East Policy.
Proceedings.33.
- Malaysian Qualification Agency** (2011) The Malaysia Qualification Framework
(5Feb2012, Retrieved 現在は閲覧不可)
- Malaysian Qualification Agency** (2017) The Malaysia Qualification Framework 2nd edition
<<https://www.mqa.gov.my/pv4/mqf.cfm>> (Last updated 25Feb2021)
- Quality Management & Enhancement Center** (2012) Introduction
<<https://qmec.um.edu.my/mainpage.php?module=Maklumat&id=60&papar=1>>

質疑応答(5分)

■木村さん以外の同僚の人や同じ機関の人が、木村さんと同じ意識を持って、機関が決めたことと自身の理念との整合性を振り返ることはあった？

■個の振り返りから、全体の変革へのうねりのようなものがあっただろうか？

水平的多様化の実現に向けて

—地方小規模私立大学での個人的試み

松本 剛次

木村と松本の問題意識の違い

- 木村の問題意識・「DLOとCLOに整合性がとれているのか」
両者の問題意識の違いは、各現場における「学士力」「MQF」などの捉えられ方の違いに基づいている。
- → あなたの現場では学士力やそれに相当するものがどう捉えられていますか？（＝問題提起①）
日本語教育は未だに「補習」的な位置づけとされている。」

本実践の狙い

- 問題意識（＝大学側の狙い）：外国語科目の授業は語学力を伸ばす
- 松本個人としての狙い：外国語科目（日本語）の授業でも高次思考力を育成することができることを示す（＝学士力の戦略的活用①）
- 学士力を高次思考力の観点から再解釈／高次思考力を学士力の観点から再解釈する（＝学士力の戦略的活用②）
- 以上を広く社会に公開／紹介／アピールすることで「水平的多様化」の実現を目指す（＝学士力の戦略的活用③）

再掲：

「学士力」の戦略的活用（アプローチの例）

- 日本語教育においても「能力」の育成は、近年強く意識され、そのための実践報告も増えてきている。
- これらの「能力」を「学士力」に重ね合わせて論じることで「水平的多様化」としての「学士力」をアピールできる。

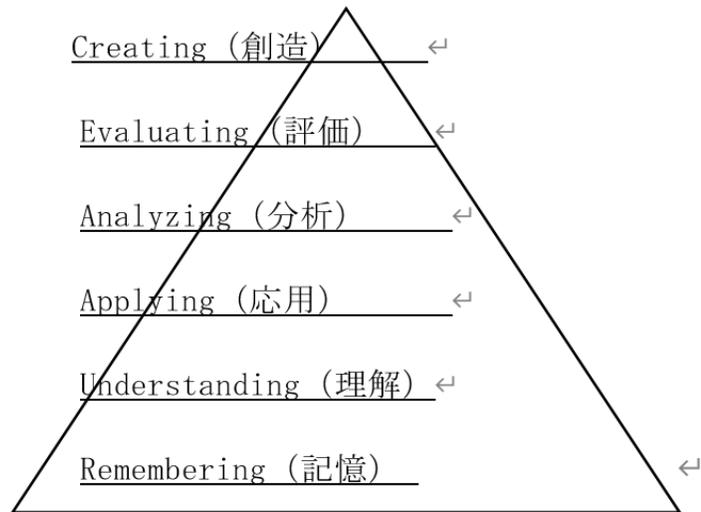
再掲：

「学士力」の戦略的活用（アプローチの例）

- 日本語教育においても「能力」の育成は、近年強く意識され、そのための実践報告も増えてきている。
- これらの「能力」を「学士力」に重ね合わせて論じることで「水平的多様化」としての「学士力」をアピールできる。

試み（1）：授業での実践研究

- 個人プロジェクト：「高次思考力の育成を目指した日本語教育とその評価」



ブルームのタクソノミーの改訂版
*アンダーソンら（2001）をもとに作図

大きく次の2つの研究から成る

①高次思考力育成のための「評価」の研究

②高次思考力育成のための日本語教育の「デザイン原則」の研究

読解の授業での応用

- ① 教科書のテキストを読む。話し合う。
－ 問題の探求。シングルループ <理解>
- ② 関連するテキストを読ませる。話し合う。
－ 問題の背後の探求。ダブルループ <応用・分析>
- ③ 関連するテキストを自分で探して読み合う。
－ 社会、文化、思考に対する探求。トリプルループ <分析・評価>
- ④ レポートを書く。それをお互いに読み合い、コメントする。
－ <創造> 一回りした上でのシングルループ

読解の授業での実践研究の流れ

1. 「モデル」に基づいた授業のデザインと実施
2. 授業の「成果」の分析（高次思考力は伸びたのか）
3. 2の結果に基づいてのデザインとモデルの修正
4. 2－3を繰り返してモデルとデザインを仕上げていくとともに、それを「学士力」の中に位置づける。

ここまでの成果と今後の課題

公益社団法人
日本語教育学会
2021年度 支部集会
九州・沖縄支部

研究発表
15:10-15:30

- 留学生のLMSへの書き込みに見られる高次思考力
一文のモダリティに注目して—
：松本剛次
(長崎外国語大学)

※事前動画を配信し、当日は質疑応答を行います。

第1部 講演
13:00-15:00
講師：渡辺寛人氏
(NPO法人POSSE事務局長)

「コロナ禍が労働市場に与えた影響とPOSSEの取り組み」

新型コロナウイルス感染症の影響で技能実習生をはじめ、留学生のアルバイトなど外国人の労働環境に大きな変化が起きています。それは日本語教師にも無縁ではありません。本講演では、今、労働市場に何が起きているのかPOSSEの取り組みをふまえてご講演いただきます。

第2部

交流ひろば
15:35-16:20

- 実践紹介「多文化に生きるこどもたちの多言語スピーチ会」
～25人のこどもたちの「自分のことば」からの気づきと学び～
：立山愛・橋原玲子・永尾美保・八丁治子・外園孝子
- 日本語教育への対話促進ツール「クロスロードゲーム」導入の試み
：豊田真規
- 日本語教員が担う管理運営業務のロードマップ作成の試み
：中川健司・平山允子・浦由実
- 介護専門用語学習Webサイト『やさしい日本語でまなぶ介護専門用語集』：布尾勝一郎・中川健司
- 大学と地域日本語教室の持続可能な連携
—「仲介者」として緩くつながる—
：松永典子

よろず雑談会
16:20-16:50

学習者のこと、授業のこと…、ざっくばらんなおしゃべりの会

第4部

お申し込み
日本語教育学会のWebサイト
詳しくはこちらから
申込締切：7月1日(木)

2021年7月3日(土)
13:00-16:50
オンライン開催
参加費：500円

【問い合わせ先】
公益社団法人・日本語教育学会 支部活動委員会
電話：03-3262-4291 Email: shibu@nkg.or.jp 対象：日本語教育に関わっている方ならだれでも

< 今後に残された課題 >

- 「高次思考力」は何らかの形で測定可能

同じテーマでも様々な意見、コメントに展開していけば、それは「水平的多様化」と言える。

試み（2）：社会への発信

- 日本語の授業での「ビブリオバトル」の実施とその発信
- 「ビブリオバトル」＝「知的書評合戦」
- 「長崎県をビブリオバトルの強豪県にしていきたい！」という想いのもと、ラジオ番組が作られている。



NBC 長崎放送

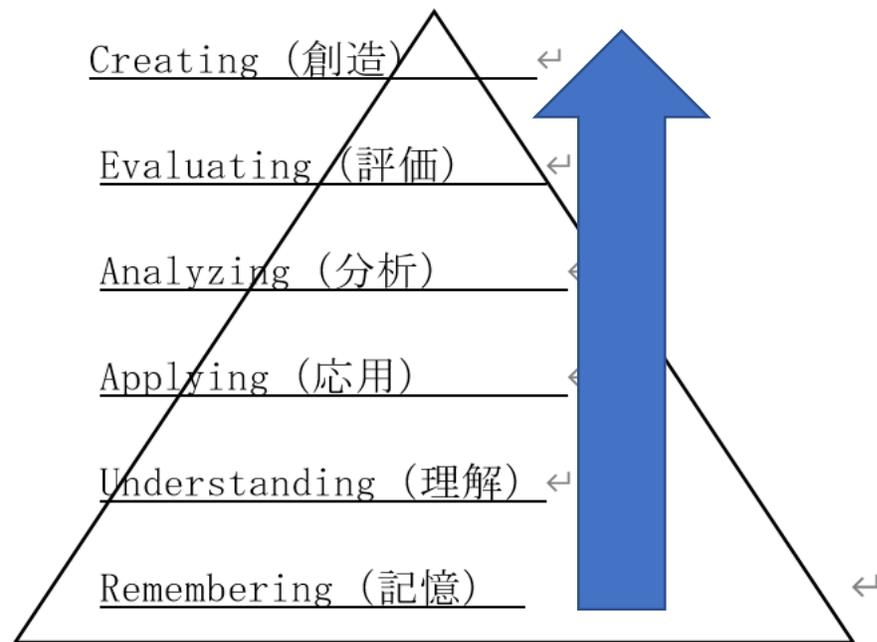


ラジオ DE ビブリオバトル

毎週 金曜 よる21時15分～21時30分

ビブリオバトル実践の 教育的効果と社会へのアピール効果

教育的効果



社会へのアピール効果

- マスコミに取り上げられやすい。
- 日本語教育は「能力」の教育に寄与していること、「水平的多様化」の実現に寄与していることをアピールすることができる。
- 日本語教育という狭い世界を超えることができる。[既存のビブリオバトルネットワークに参加できる。](#)

まとめと問題提起

個人プロジェクト：「高次思考力の育成を目指した日本語教育とその評価」

日本語の授業での「ビブリオバトル」の実施とその発信

まとめと問題提起

問題提起②：

あなたの現場ではどのような実践が可能ですか？

実践が難しい場合、何が原因だと考えられますか？

参考文献

- 松本剛次 (2021a) 『21世紀型能力と日本語教育 批判型日本語教師研修モデルの提案』早稲田大学出版部
- 松本剛次 (2021b) 「留学生のLMSへの書き込みに見られる高次思考力一文のモダリティに注目してー」日本語教育学会2021年度九州・沖縄支部大会予稿集
- Anderson, L.W et al. *A taxonomy for Learning, Teaching, and Assessing: A Revision of Bloom's* . Pearson, 2001.

質疑応答(5分)

- 「多様化」をどう測るか

ブレイク・アウトセッションテーマ (これまでの「問題提起」から)

- あなたの現場では「学士力」(海外の場合はそれに相当するもの)がどのように取り入れられていますか？
／どのように捉えられていますか？
- あなたの現場での「学士力」(海外の場合はそれに相当するもの)の「戦略的活用」としては、どのようなことが考えられますか？
- それが難しい場合、何が原因だと考えられますか。

ブレイク・アウトセッション

- 3人グループで、テーマについてお話ください。
- ファシリテーターは各部屋をまわります。
- 全体セッションでは、各部屋での話を共有していただきます。

全体ディスカッション（1）

- 実際授業の中に学士力・その背景にある能力観を採り入れている。大学からもそのように言われている。実践のアイデア：キャリア教育と結びつけられる。
- 学士力をどう考えるか？各々がイメージする学士力の確認。大学であればDP、CP。
- 授業にどのように採り入れているかは愚問。DP、CPに基づいて行われている。
- 自問できるようなになればいい。
- 高次思考力：現行の大学教育でそのような力を伸ばすことができているか？言語力、専門知識、プラス α 。
- 学士力の項目をシラバスに書くように言われるか？⇒強く要望はされていない。要望はされていないが、学士力を高められる授業を行っているので実践報告などでアピールしたい。
- 英語の中では多様な科目がある。多様化というより同じようなものになる？
- 非常勤講師という立場：大学からCPの説明はない。シラバスに書いてほしいという要望もない。学士力を伸ばす良い機会なので個人的にはやりたい。そういう授業をしようとする、学生から「それは語学？」と聞かれる。高校の授業の影響？
- 初年次教育：CPの説明が成される。担当教員の教育観に大いに左右される。教養でも語学でもその教員の教育観による。
- 早稲田：上からそれほど説明はされない。漢字を覚える授業もある。漢字に興味を持ってもらいたいと考え、そのための工夫をしている。やり方によって同じ授業でも違う展開がある。
- 自由度が高く現場の教員に任せてもらえるのはいいが、大学にフィードバックする機会があるとより良い授業になるのではないか。

全体ディスカッション（2）

- 所属する機関がめざす共通の目的はあるか？⇒機関・通常の授業にはあるが、独自に企画するイベント（読書会等）にはない。母語話者と学習者が共に学び合うことで母語話者神話を崩すことが、イベントの目的。
- 国内私立大学：DP「～する力」5つ。各箇所DPをかみ砕いたCPがある。自分の所属する新設学科ではこれから作っていく。語学教育と国際化の二本立てでカリキュラム改変している。大学としては「留学生に沢山来てほしい、DPに到達するために日本語教育では色々な試みをしてほしい」。一方、既存の学部の要望は「留学生の日本語力を上げてほしい」（語学教育に対する固定観念がある）。学部とやることが重ならないように、語学力を上げてほしいという要望をふまえ、オリジナリティがあるカリキュラムを作る必要がある。初年次教育の要素を取り入れ、批判的思考力・自分で発信できる力の育成などをめざしている。⇒他部署（例：初年次教育、学部）との棲み分けも必要。
- 学部との橋渡しをする時に「学士力」やDPを戦略的活用できないか？ある意味共通言語。
- 「戦略的活用」の意味がわからない。
- 発表は「水平的多様化が言語教育では行われていない」という問題提起かと思ったが、違った。
- 自分の所属機関のポリシーは多文化共生をめざすこと。学士力のような規定はない。だから今日の発表は驚いた。
- シラバスを書くときにDPのどこに相当するかを書く。
- どういう教育をしたいかという教師の教育観がゴールではなく学習者の学習観がゴール。学習者にどう学びを見てもらうようになるかまでは至らない。
- メタ的に自分の学びを理解する学習者は少数。
- 学習者の個々の学びを捉えるためにポートフォリオが活用されているのでは。
- 自分の機関ではポートフォリオは全然活用されていない。DPも忘れてしまう。
- 短期間で教育成果を見せなくてはいけないので難しい。
- 色々な学校で授業する非常勤の先生はどこまでDPに左右されるのか？すべての大学のDPを把握してやっているわけではないのでは？カリキュラム・デザインする専任の特権？